



おちほ

第51号 平成17年3月20日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 山下 陽一



クリスマス!



落穂寮の

「メリークリスマス!」食堂に響く元気な声。今年も12月24日のクリスマススイブに落穂寮のクリスマス会がにぎやかに開かれました。

さて、今年の出し物はどうと：まずは去年に引き続き浜口さんと旧職員の阿部さんのお母さんが参加して下さり手品(そういえば去年は手品ブームでしたね)を披露して下さいました。不思議な手品の数々に寮生さん職員共に口あんぐりで目はステージに釘付け。大いに楽しませていただきました。

続きましては職員のバンド隊の登場。クリスマスソングには寮生さんも太鼓やタンバリンで演奏に参加。楽器を持ってない寮生さんも歌ったり体を動かしたりとみんな一緒に大盛り上がりでした。

最後はこれも恒例になった職員によるダンスが行われました。ダンスといえはそう、去年大はやりだった「マツケンサンバ」今回はチャンバラ時代劇もあり、みんな大爆笑、楽しいクリスマス会になりました。

さて夜にはお楽しみみのディナータイム。いつもより数倍(?)豪華な夕食を食べた後はサンタさんからのプレゼント。それを手に取り笑顔いっぱいみんな。こんな幸せな気持ちになるクリスマス会をこれからも続けていきたいですね。



思ひ出のアルバムへ完全保存版



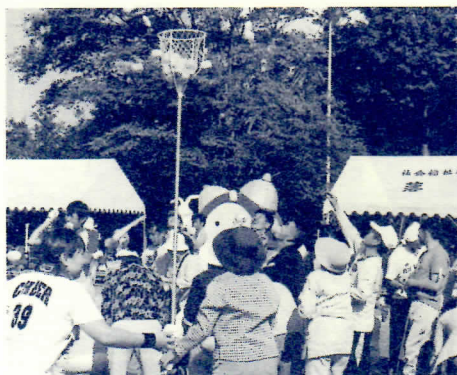
運動会も転換!

落穂寮では毎年十月に「運動会」を行ってきました。児童施設の頃は、寮生さんの日頃の訓練や学習の成果を披露する機会のひとつとして、また保護者との数少ない合同行事のひとつとして行われてき



ました。しかし落穂寮は成人施設に転換され、寮生さんの年齢も若いとはいえないようになってきた事、保護者の方々の参加も体力的にしんどくなっている事も考え、職員の中で運動会をやめようという話になりました。しかし運動会は数少ない地域の方々が来られる行事である事、楽しみにされている保護者や寮生さんもある事、特に寮生さんは、保護者に会える事が何よりも嬉しい事なのです。そこで、今までの訓練・学習という対象から、現在の生活を支援するという対象に変わったので、運動会も「見せる」から「楽しんでもらう」に変えました。そこで

しんでもらう事にしました。種目に出て頑張る方も、応援を頑張る方も自由に自分にあつた参加の仕方での一日を楽しんで



もらえればと思いました。当日は全員紅白に別れ（お客さんは自分で選択）、入場門、退場門をなくし、



入場行進もなくし、開会式には寮生さん職員だけでなく、保護者や地域の方々も全員参加してもらいました。寮生さんは徒走のみ全員参加されましたが、後の競技の参加は自由。職員も声かけだけで、手をひいてという事はしませんでした。行う競技も年齢や体力の事を考慮して、応援合戦などの参加しやすい、したくなる様なものを考えました。

当日は天気も良く、のんびりした感じでした。今までは参加しない（したくない）寮生さんに、職員が「がんばれ、がんばれ」と手を引く事がありました。今年はそのもなく、自分達の楽しみで一日を過ごせたのではないのでしょうか？

最後に参加された保護者の方々、地域の方々、ありがとうございました。

職員も、ただ毎年同じ行事を繰り返すのではなく、寮生さんにとって「楽しみ」とは何か？「どうやったり楽しんでもらえるか？」を考えていかなければいけないと感じました。

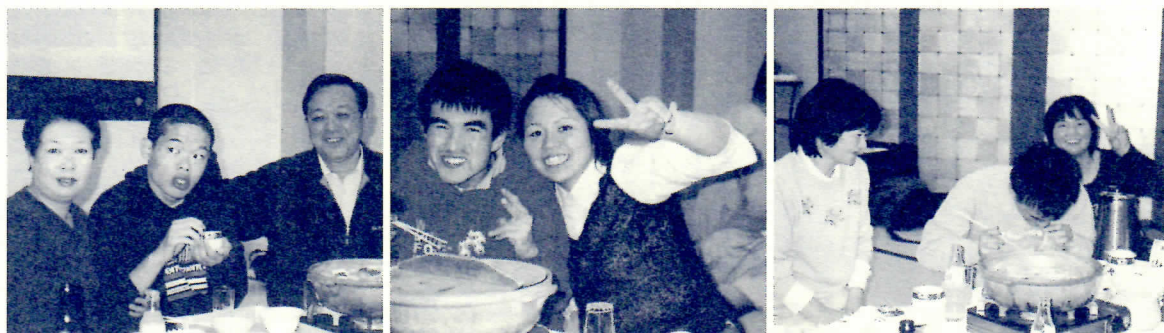
親子旅行

今年の男子棟親子旅行の行き先は近江八幡国民休暇村。しかし旅行といってもメインはお食事なのです。

今回のメニューは、カモ鍋。コンロ横に置かれたレシビを見ながら各テーブルともに鍋作りを始めたのですが、痛い位に寮生さんの視線が突き刺さります。でも「早く食べたい!」、そんな寮生さんの気持ちはよく分かりました。見るからに美味しそうで、そしていいにおい：♡のお鍋だったのです。

あつたかいお鍋はとても美味しく、自然に笑顔がこぼれました。美味しい物を食べている時の寮生さんの笑顔。その笑顔を見て保護者の方はもちろん、職員も自然に笑顔になってしまいました。笑顔が笑顔を生む：とても素敵なことです。あつたかい空気の漂う会場。その、あたたかさ、はお鍋からの熱気によるものだけではなかったはず：。

今回の男子棟親子旅行も笑顔の花・満開になったモノとなりました。次回の親子旅行も笑顔の花よ、どうか咲き乱れて下さいませ：。



「笑顔花」、本日満開なり

忘年会

年度終わりではありませんが、とりあえず一年間ご苦労様の意味を込めて女子



棟全員で鍋をしました。

寮生さんはあまり、今年も終わりという意識はないようでお食事会の状態でしたが会話の中で、どこに旅行に行った：など思い出し一年間をしっかりと振り返っておられました。

親子旅行

11月23日に女子棟の親子旅行をしました。行き先は三重県・阿山のモクモクファーム。

到着後、まずはバーベキューを楽しみました。親御さんと一緒に美味しいお肉を食べた後は園内散策。いかだに乗ったり、やぎにミルクをあげたり、ビールの試飲をしたりと、親御さんとの楽しいひとときを思い思いに過ごしておられました。



ハイ、ポーズ



いただきま〜す



寮長 山下陽一

追懐

堀隆史さんが他界しました(享年三七)。前日(〇五年一月三日)の夕刻の入浴はニコニコしながらのものだった、と聞いています。

落穂寮に入所してきたのは十一歳です。二七年間も生活を共にしていたことになりました。当初ご両親は食生活にかなり苦勞されていたのではないかと思います。ハンバーグ、ジュースが大好き人間で、細いからだつきで落穂寮での生活をはじめました。

機嫌のいい時は日当たりの良いホールの窓際にあぐらをかいて上半身を前後にユラユラしながら、彼独特の小指を立て、人差し指で「シー」というときのしぐさで唇にトントンと指を当てる動作を繰り返していたことが思い起こされます。二十歳に達してしばらく、突然でんかん発作が開始されたときにはずいぶんご家族の方々も心配されたことだと思います。

彼の生前を思うとき、常に「お地蔵さん」然としていたように見えましたが、決してのん気ではないかな生活ではなかったのではないかと思います。彼は他の生活仲間

が攻撃を仕掛けてきても反撃することをしませんでした。ひたすらカナワン、カナワンと逃げるだけでした。言葉として人に伝えられないものだから、自分の頬を打って気持ちあらわすより方法をしらないようでした。

また、「てんかん発作」が出てきたことにより、薬を飲むことになりましたが、抗てんかん薬は私たちが服用すると激しい眠気と吐き気をもよおすもので、薬効のある日中は随分眠くけだるい気分の中で寮生活の日課を消化しなければならぬわけですね。しかし、これは眠いからといって日中寝ていたら睡眠のリズムが狂ってしまい、身体的、精神的に不健康な状態に陥ってしまうわけですから、眠いなかでも身体を動かして、一汗かかせる日課を課しているともいえるのです。

彼は仕掛けられると逃げる意外になく、また薬によつてボンヤリ状態になりながら、活動しなければならず、私たちでは予想もできない負担をかかえつつ数十年を送っていたのではないかと、そんなことを思います。

感謝

さらに加えるなら、落穂寮は堀くんのお父さんやお母さんに大変お世話になったことも書き添えたいと思います。

これら様ざまある中で、落穂寮の改築には大変なお骨折りをいただきました。施設の建設ですから役所へ出向

いて各方面にお願いにあがるわけですが、「堀さんの息子さんが落穂寮にいらんだってな」そんな反応が返ってきました。私たちが知らないところで働きかけておられ、お世話になっていることを実感したものでした。

また、お母さんには建設計画のときから保護者会の会長を引き受けていただき、施設建設に傾斜して理解をいただけて、私たちとしては本当に力付けられました。

九六年九月に建設について県と最初の協議を行いました。それが落穂寮の建設は県が認めても国が認めなければ建設が進みません。改築については県は必要な事業として認めたのですが、当時は橋本内閣の構造改革論が主流で、国費支出削減のため当時の厚生省から認可が受けられませんでした。

まさに万事休す。

このときほど国政と日常の市民生活が直結していることをありありと実感させられたことはありませんでした。

県の担当者から説明を受けました。が、前途の見通しがまったく立たない不安の中で、来年もどうなるかわからないと言われながら、計画は進行しつつ資金も動いておりました。あれやこれやで気落ちしている中、周囲からも「ざまーみやがれ、といわれてるぜ」などの誹謗の一撃。(これには閉口しました)

ところが堀くんのお母さんは違っていました。「一年伸びたと思つたらよろし

い」これを聞いたときそれまで毎日暗澹としていた気分を一掃することができました。(これは本当にありがたかった)

このことはお母さんには何度も繰り返し話したことなのですが、もう一度「堀くんのおかあちゃんのお陰です」を伝えたいと思っています。

誓う

さて、てんかんがあり、抗てんかん薬などかなりきつい薬を飲みながらの生活が過ぎていきます。落穂寮は医療施設のように、ひと、もの、金、情報がありません。呼吸が突然不規則になることがあっても、病院のI・C・Uのように呼吸が停止すると警報を鳴らすような機能を發揮することができません。そのため、日常の些細な異変に気づくことを身につけなければならぬその努力を重ねなければならぬと思つています。そのことは日常の一つひとつ一人ひとりの支援対応に問い掛けを發してその見直しが迫られていることを実感します。

黙禱

彼がホールの窓際に日差しを浴びながらあぐらをかいて身体をゆすつている姿を、意識を集中して黙禱するとき、悲しみとか残念などの感情のものではない涙が涌きにじみ出るのを覚えます。

ほほえみをありがとございませう。天国でも楽しくおすごしくください。

平成十七年の年が明けて十四日目の朝、堀隆史さんが三十六年と十ヶ月で人生を終えられました。持って生まれたハンディや完治の難しい病気を患っておられたにせよ、とても短い人生でした。

隆史さんと言えば、思い出されるのはやはり笑顔ではないでしょうか。見ている人が思わずつられてほほえんでしまうような、そんなとても幸せな気分にして下さる



▶入寮時の隆史さん

笑顔でした。

そしてもうひとつ。大の音楽好きでした。行事があるとスピーカーの前に『でん』と座り、全身で音楽を聴かれ、両手を広げてまるで指揮者のように振りながら楽

当然だと思うのですが、寮生さんが約一時間もの間、ずっと椅子に座って静かにお別れをされていたのには驚きました。これもやはり、隆史さんの笑顔の成せる業なのでしょう。隆史さんのお父さんも、



▲成人式日の隆史さん

しんでおられました。

二月十七日には、そんな隆史さんを偲んで、大勢の方に参列していただき、お別れ会が行われました。隆史さんとの思い出に、どの職員も目頭を熱くしていたのは

感心しておられるほどでした。

隆史さん、これまで本当にありがとうございました。やすらかに眠りください。さようなら。



▲隆史さんのお別れ会



▲H16年のレクリエーション大会

昔々今ふく

「ホームページ」を登録して
「ようこそ推の木会へ」

理事長 増田正司

旧年十月、石部地区の福祉施設がすべてインターネット上に、それぞれ特色ある活動の成果を「ホームページ」上に紹介しており、落穂寮だけが作られていない、時代の要請に答えていないと深く反省させられた。

傘下の杉山寮は数年前から「ホームページ」をたちあげ、各方面から注目されていると聞かされていた、親もとがそれに無関心で過したことはとても恥ずかしい。

落穂寮の職員の中にはパソコンに習熟している人もおられると思うが、とりあえず気づいた自分が作って後から若い人たちの協力応援により精度の高いものにしていくとして、参考書やソフトウェアを取り寄せこわごわ練習をつみ、登録後に更正もできるからと「椎の木会、落穂寮、しいのきホーム」あわせて「杉山寮、杉山ホーム」をふくめた「ようこそ椎の木会へ」と題するホームページを登録した。法人・施設が進むべき道を示し、要支援者の方々がその人生に喜びと生きがいを求めて努力する念願を、何としても実現したいという信念のもとに、われらも歩いていることを伝えるホームページを作り、たくさんの方たちの共感と協力をいただく。

創立以来の50年分の文書・記録写真を検証

し、パソコン上に展開構成するのは大仕事だった。マニュアル片手にキイを打ち込み、毎日8時間余、パソコンに向かう連日連夜の二か月間が続いた。

法人の沿革、落穂寮・杉山寮の紹介、しいのきホーム・杉山ホームの紹介、便り「おちほ」の記事掲載、近隣施設へのリンク、法へのリンク、メール依頼などの項目をならべた表題の頁づくり、各項目毎に展開し、それぞれの詳細を伝える文章と写真による構成となった。

今回は、創立以来の経過を伝えることに多くを割いたが、更正の次回には将来を見通した今の実践にふれた報告を伝えていきたい。ホームページを作りつつ、現実の歩みがより力強く、施設創立の初心「施設が要支援者の方々の出発点」として働いているか、改めて考えさせられた。

(05/02/10)

昔々今ふく

泉

▽先月、近畿地区知的障害関係施設職員研修会が滋賀県で行われました。様々な種別の職員が集まったの勉強会のようなものです。その話の中で、今後の利用者負担金についての事が一番気になって仕方ありません。それは、応能負担（所得に応じて負担）から応益負担（サービスを受ける者が所得に関係なく負担）に変更される事です。つまり「必要最低限のサービスは受けられるようにするが、それ以上はお金がない人は受けられませんよ」という事です。福祉とは、人が主体的に幸せな生活を送ることができるようにサポートすることです。思想のないところに福祉は存在しません。直接彼等と関わる私達は、しっかりと心の中に「ふくし」の思想を持たなければと思いきらされた研修会でした。

木

言

種は落ちてはじめて生を得る。落ちるためには、たくわえがひつようだ。大地をつかみ、両手をひろげ、胸いっぱいひたすらを。新たな芽の先に見えるものは、笑って見上げる多くの顔。信じることは、すべてにつながる。